

煎餅竹馬やて塚山を

あとに見て勝間の浦に木

津の村蛭子太神福德を

いのる願ひは今宮へ正月

十日に群参の小判に

金はこ米俵米花袋に

取鉢立鳥帽子篋もて

かへる千鳥足広田の社

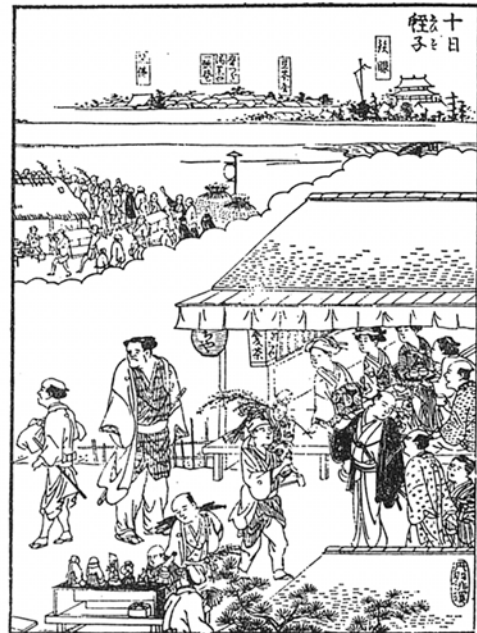
(55) 小高い丘にして、遠山、滄海眺望すばらしく、遊観の勝地なり。

(56) 岸の姫松という松原あり、風景いたつてよし。

(57) 木津川の千本松あり、洋々たる滄海に築き出したる松原の風景は名高き天の橋立・三保の松原などにも劣らず。舟上より遊覧する人常に絶えず。

(58) 今宮森にあり。祭神||中央、天照大神、左、蛭子尊・大己貴命、右、素戔嗚尊・月読尊。毎年正月十日大いに群参して福德を祈る。

(59) 今宮の北にあり広田社という。祭神||天照大神。流鏝馬の神事は戎社と合同の祭祀なり。社前の西側に萩の茶屋あり、紅白の萩を植え参詣人遊客をよろこばす。



十日蛭子

なむ八邦牛頭天王の  
 祭りにと左右に分れ大  
 綱を力をあはせ索争ふ  
 鉄眼開参の瑞龍寺難  
 波新地の大相撲松の尾  
 兎角いまやうのみ世物  
 あまた道頓ほり歌舞  
 妓劇場や機振や戯棚

(60) 難波村にあり。本尊深砂大王。毎年正月十四日、産子の人々左右に分かれて大綱を争い引き、勝方がその年の福を得るという。

(61) 難波村北端にあり。禅宗黄檗派慈雲山瑞龍禪寺。本尊薬師瑠璃光仏。鉄眼和尚開基により鉄眼寺ともいう。延宝四年(一六七七)諸堂に雪の積もる風景は我国にあらざる思いの美観なり。

(62) 大相撲は毎年三ヶ所の津で行われ、最も賑わしきは難波新地の大相撲なり。ひいきの関取が勝つと花としていろいろの物を土俵へ投げ入れる。興行中の賑わい言語を絶する。

(63) 東横堀川と木津川を結ぶ堀の南岸。慶長十九年川を掘り地を開きあと年々繁昌の地となる。寛永三年(一六二六)芝居・遊所が認められ歌舞伎、操など芝居小屋が建ち並び常に興行があり賑わしく浪花第一の歓楽地なり。



道頓堀歌舞伎劇場

かすく二つ井戸三津寺

す芸て三津八幡流れ

十字の川々にかけ渡し

たる四橋を越て堀江の

阿弥陀池すむか中にも

花街なる長柄の傘に

高木履かしらにかさる

櫛簪 鰲甲瑠璃しろ

(64) 道頓堀の東、堀留町にあり、清泉にしてこの附近の民家の用水なり。石の井筒の中に隔てる石を積み二つの井戸とする、ゆえに名がつく。

(65) 三津寺筋にあり。古義真言宗大福院と号する。本尊十一面観世音、行基の作。楠の大樹は火災で焼失したが、焼のこりの幹の洞に如意観音菩薩を安置する。当寺は浪花市中繁昌の地なるうえ、観音めぐり第三十番の札所且つ、大師めぐり二十一番の打どめなり。参詣の人常に間断なくすこぶる賑わし。

(66) 島内木綿橋筋にあり。祭神ニ応神天皇。夏祭には神輿渡御の儀式あり。また年祭は、節分の夜生土の神社に参詣する年参りは、他の諸社ともに賑わしく甲乙つけ難いが、当社は道頓堀にも近く、参詣の人も又花やかにして賑わし。境内に彩どる細工鮎を商う店多く出て、年鮎として人それ／＼にこれを求む。

(67) 西横堀に上繫橋、下繫橋、長堀に吉野屋橋、炭屋橋があり、これを合わせて四ツ橋という。二つの川が十字字となり橋を四方に架している。四ツ橋を渡る人、川船の往来の絶えまない風景にしばし足を停める。また、ここに源蔵張りという煙管の店があり世に名高い。

(68) 北堀江御池通にあり。蓮地山和光寺境内にある。池に蓮多く花盛り頃は清香一円に薫る。境内には店の軒を連ね、門前の芝居賑わしく、参詣の人常に絶えず。世の人寺号を唱えずして阿弥陀池という。

(69) 新町傾城傾国。新町橋の西の方四町をいう。寛永年中傾城廓の許可を得て、諸方の花女を一ヶ所に集め、田圃を開いて町とする。世の人新町とよび廓の総称となる。



四ツ橋



かねこかねうちかけまとふ

綾錦実や傾城傾国の

容儀を<sup>(粧)</sup>救ふ糸竹の音

もなつかしき歌の曲<sup>(砂)</sup>

場の蕎麦<sup>(そば)</sup>や九条しま

わたしの小舟松かはな

はや木津川<sup>(72)</sup>や尻無<sup>(73)</sup>かは

さし入<sup>(さし)</sup>篙<sup>(さし)</sup>は竹林寺茨<sup>(75)</sup>

(70) 新町西口南。麵類を商う家あり。難波の名物として遠近より集まり、日々数百に及ぶという。甲斐国鶴郡の水を飲めば人壽鶴の如し、砂場の蕎麦を喰う人、寿命も同じという。

(71) 寛政年中に香西哲雲が水害の多い当地を開発した。

(72) 長堀、道頓堀および西の方の諸流ここに合流し、この川口を浪花の湊とする。貞享年中、安治川口ひらけて南北二ヶ所の川口となる。諸国の廻船ここに集り、これより上荷船などに移し、五穀雜貨を蔵屋敷や問屋へ運送する。九條島、安治川口と並び諸国の海船の出入を改める監船所もあり。また連船の中を小舟を漕ぎつれ、酒肴、麵類野菜など売る人の声、またその船に遊女・伽を乗せて三弦を弾かせ何やら声をあげるもある。これを世人伽遣船という。

(73) 木津川の分流。末は海に入る。此の川両堤にはじの木数千株植えつらねて実をとり、餅を製する。紅葉の頃は川の兩岸一円紅となり、川面に映じて風景殊に佳し。老若うちむれて風流を楽しみ、酒宴に興じて常でない賑わいとなる。また晩春の汐干には、蛤とりに川下に群れて遊び楽しむ。中秋には釣竿を携えて沙魚を釣るもの多く、陸より至るもあり、舟に棹さすものあり夥しい。

(74) 茨住吉の北にある。浄土宗如心山宝樹院と号する。本尊、阿弥陀仏、恵心僧都の作。庭前に香の梅あり。香西哲雲この木を植えて、難波津香の梅と銘つけ、和歌を詠て鳥丸光広卿に奉る。

(75) 九條しまにあり。祭神、底筒男、中筒男、表筒男、神功皇后。寛永元年(一六二四)九條島開発の時土地守護のために勧請する、という。池に燕子花繁茂し、花盛りの頃は貴賤ともに群参して甚だ賑わし。



新町 九軒町

すみよしうらつたひ

目印山は安治川口いり

くる千船こき競ひ一の

洲越てみをつくし筑

紫陸奥蝦夷琉球運送

たえぬ大湊えいやくと

引く網も鯊釣舟もうこ

むれてよしあしそよ娯

(76) 安治川口にあり。天保二年

(一八三二) 安治川および大坂の川々の浚たる土砂を積み上げ、高灯籠を設けて入港する船の目印とする。天保年間に新たに出来たるを以って、俗に天保山という。この山は四方の眺望よく風景美観なれば常に遊興の人絶えず、そのうえ山中及び平地に桜多く、花の盛りの頃は殊さらに賑わしい。

(77)

諸国の廻船ここに集り、上荷船・天満船を以って五穀雑貨を蔵屋敷や商家に運送する。湖の満干により出帆する船や着船が川口において相競うは見事な光景なり。

(78)

漂標。通行する船に深い水脈を知らせるために立てた杭。難波の漂標として、古来より摂津に在る。有名なるは水尾木(漂木)が他と異なり、上の印の木の形は鱗魚の尾に似て、俗にこれを鯖の尾という。これは浪花第一の景物という。



水巴衝石 (漂標)

秋の風沖ゆく鷗磯千鳥

波よけ山とあとになり

いろくくと跳る雑<sup>(80)</sup>喉場の

市売買ふ声にかみひ

すり干鰯はうつ保永代浜

野田の細江と紫の藤

なみかゝる玉かはやてに

喜いてふ田蓑<sup>(83)</sup>のしま浦<sup>(84)</sup>

(79) 瑞見山ともいう。貞享元年(一六八四)河村瑞見によって安治川が開削されたとき土砂の小丘を築造する。洪水の時高波をここに防ぎ除くとして波除山という。丘の上に松の木を植え、航海する人の目標にしたという。  
 (80) 江戸堀、京町堀の西にあり。毎朝遠近の浦々より運送された大魚は、鯨、鰯から鰯、鰯の小魚まで群をなして市を立て、また昼の市網の市は未の刻の後にあり。これはその昼漁れた魚を直に早船にて漕ぎ着け市を立てる。ゆえに新鮮なり。夏は六月朔日より夜市あり、たい松を焼きて売り買う。

(81) 海部堀にあり。この浜辺に諸国より積上げる干鰯の土蔵が数多くあり。かくて市を立て交易し、又これを諸国に商う。農家は干鰯を田圃の肥料とする。これを俗に金肥という。鰯干は鰯のみでなく、玉筋魚、蟹および鰯、鰯などの油をとったあとと粕、即ち鰯かす、鰯かすという。皆田圃の肥えとした。  
 \*うつ保の町名の起りは、豊臣秀吉が市中検分のおり、この地の塩干商人達が「何十分やす!!、何百文やす!!」と声をあげて売りさばくを聞き「やす(矢巢)とは藪(矢を差入れる道具)のことだろう。矢が藪に安んずるは吉祥だ」と言えり。その後町名を藪町にしたという。

(82) 野田村春日の林中にあり。往昔より紫藤名高く、小歌節にも、吉野の桜、野田の藤と唄われている。弥生の花盛りには、遠近ここに来て花見を楽しむ。茶店、貨食店とどこどこに出でて賑わう。天文年中逆乱の頃兵火に罹りて亡び、ただ古跡のみとなる。文禄年中、秀吉ここに立寄り、僅かに残りし紫藤を遊覧される。その時の休憩所を藤の庵といふ、御傍衆曾呂利新左衛門に額を書かせられたので曾呂利の庵ともいう。  
 (83) 難波八十島の一つ。その位置については諸説多く浦江の大仁の地、また一説には佃島に田蓑と称する地ともいう。ともに定かならず。

(84) 南浦江村、五百羅漢の北にあり。歓喜天堂のこと。寺を了徳院と号する。参詣の人常に間断なし。境内の池に燕子花多く、花の盛りには紫白の色交りて美観なり。老若野辺に摘草し、ここに集りて光景を眺む。

江聖天燕子花大にむら

にと王仁(85)の塚五百羅漢は

妙徳寺(86)にも福島に名の

高き判官義徑景時と

論せし跡の逆櫓(87)のまつ

上のてくむ堂島(88)や糶(ちやう)

糶指先(てき)にて百万斛(こく)を

うこかすと与所(よそ)に類(たぐひ)は

(85) 大仁村にあり。古松一株あり、その下に今は小祠を立て祭祀する。祠は小なれど立どまり手を合わす者すこぶる多し。  
 (86) 福島(86)の北にあり。禅宗黄檗派竜王山と号する。開基鉄梅和尚。五百羅漢を安置する。これ福島(86)の五百羅漢として有名。詣人春秋には殊に多し。

(87) 上福島橋爪町にあり。伝云う。元暦の頃、源廷尉義経と梶原景時の逆櫓(87)の論ありし古跡という。大樹にして幹の形驚蛇(おどろか)に以て、実に千年を経ている如く名松と見える。

\* さかろ 鱸(うなぎ)(船の後方・船尾)にも船(ふね)(船首)にも相向って艀(か)を設け、前後いずれにも進ませ得るようにすること。またその装置。(広辞苑)

(88) 中之島の北にあり。この地は大川の流水西に至りて二條に分かれ、北は蛸川、南は堂島川、その二流の間にある島をいう。初め鼓の筒になぞえられた筒島と名づけられたとか。貞享年間公命により開発して市街となり、堂島の市立は雑穀を糶糶市場なり。米市場には早朝より商人群集し、百万斛数を指先で動かす。晴雨寒暖により米価の高低日毎に変わり、売買の賑わしき事他に比類なき市という。米市に集まる町人の興奮を鎮めるため水をかけることもあり。



堂島糶糶 (こめあきなひ)

なかりける露(89)の天神宮

山寺夕日の神明堀(90)かは

えひす河原の大臣の大融(91)

寺北野(92)の社と綱敷なり

円頓寺(93)の天竺在三番なる

東光院(94)もさかりなり

こむけのむまつより鬼子(95)

母神名のみ長柄(96)の橋柱

(89) 露の天神、曾根崎にあり、祭神は菅公。世人曾根崎天神、又俗にお初天神とも。菅公築紫へ左遷の砌に詠まれた露と散る涙に袖は朽ちにけり

都のことを思ひいづれば

これより露の天神の号あり。この辺俗に北の新地・堂島新地といい、宝永五年の開地なり。夕暮より両側には軒の懸行灯輝かしく、紅顔雪肌べにがほの輩ゆきまきて、楼上には琴曲・糸紋いとごの音麗しく、芝居あり、射場ありて常に賑わし。

(90) 寺町の西にあり。堀川は、もと戎社よりおよそ二丁余りにて堀留であった。岸の辺にはごもく山といわれる程の見苦しい地なりしが、近年これより東へ淀川筋まで新たに開削され、大川の清水、潔く流れ、また堤には桜の木を植え連ね、花の頃には遠近の老若ここに群集し、光景を満喫す。恵比須社。俗に堀川のえびすという。祭神は蛭子尊・左少彦名命・右太玉命。

(91) 北野にあり。佳木山と号する。古義真言宗。高野四善庵に属する。本尊は千手観音。当寺は難波の古寺にして、弘法大師の開基なり。嵯峨帝の皇子左大臣・源融公が七堂伽藍を建立したことにより大融寺と号する。春は堂前の藤色鮮やかに咲き乱れて、参詣の人の眺めとなりて賑わしく、また愛染堂、庚申堂もあり、緑日には老若群参して殊の外賑わし。裏門の傍にも藤棚あり、湯豆腐の茶店はここの名物なり。

(92) 北野にあり。北野天満宮。菅公の敷かれたる綱があり、俗に綱敷天神という。

(93) 稲荷山円頓寺、北野にあり。この地は初め稲荷社を祭りて稲荷山と称し、風景よく勝地なり。後年円頓寺と号し、日蓮宗の梵字を造立する。昔より祭れる稲荷社を鎮守とする。寺内に萩多く、花の頃紅白を交えて美観なれば、衆人集いて遊樂す。

(94) 下三番村にあり。禪宗仏日山東光院と号する。観世音菩薩、厄除薬師如来を安置する。庭中に萩を多く植え、花の盛りは麗わし。世俗に三番村萩の寺という。

(95) 浜村にあり。円満具足菜文鬼子母天を安置する。靈験あらたなりとて遠方より詣人間断なく、宝前の供物、献灯、香花の甚しきは言うに及ばず。参詣の人群れて題目など唱うる声やかましい。参道には、茶店、貨食家建ち並び、信者の支度、礼参の休息をもてなす。とくに例月八日には殊更に群参して、すこぶる賑わし。浪花北方の流行神という。

(96) この橋の旧跡、古来より定かならず。橋杭と称する朽木所々にあり。長柄橋は長さ一里ありしと云う。一橋の名にあらず、島より島へ渡して、橋の数多けれど、地名によりて皆長柄橋という。本来は名柄豊崎橋であろう。古来よりも今の北長柄より豊島郡垂水庄に至るまでを長柄の橋跡という。